宗像

高宮神奈備祭全景。 宮司の祝詞奏上時にちょうど薄暮となり、バックはブルーになってます

六三〇年振りに『八女神事』を再興 秋季大祭を締め括る祭典として

高宮神奈備祭 斎行

秋季大祭最終日の十月三日午後六時より、当大社では沖ノ島と並び最も神聖な場所である「高宮祭場」で、かつての『八女神事』をちょうど六三〇年振りに『高宮神奈備祭』として再興。当大社神島宮司以下神職、太宰府天満宮神職・巫女、氏子青年会の総勢五十一名が奉仕し、参列席を溢れる程の約三〇〇人の人々が参列し、盛大裡に斎行された。

この祭典は、一日の「みあれ祭」でお迎えした宗像三神に、秋季大祭の無事斎行を感謝するとともに、新たな霊力を戴かれた三神の神威の無窮を祈念する祭典。

当大社では、永年神道の原点を伝承する高宮での祭祀復活を願ってきたが、今春の宗像市・大島村の合併により、宗像三宮（沖・中・辺津宮）が宗像市へ、そして「宗像大社氏子青年会（吉武邦彦会長）」の結成（今春三月二十七日）による地域住民の協力体制も整い復興された。

高宮での祭事は「八女神事」として、応安六年（一三七五）に当時の禰宜致廣が年中祭事を記録した『応安神

11月祭事暦

○1日 **月次祭**
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社
月命日祭
午前11時～
総社祭
浦安舞 奉奏

○15日 **月次祭**
午前10時～
総社祭並びに七五三祭
総社祭終了後、引き続き
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社巡拝

○3日
午前11時～ **明治祭**

○23日
午前11時～ **新嘗祭**

余滴

宇治橋を渡り、玉砂利の参道を進む、ザッ、ザッという音と感触で足元から祓い清められる。途中、五十鈴川の清流で手を清め、さらに参道を進むと、深い森、高く聳えた千年杉の霊気により清められ清々しい気持ちで御正宮に参拝が出来る。伊勢神宮に参拝毎に思い、日本人を意識する▼古代より日本人は、神霊に和魂・幸魂・荒魂・奇魂の「四魂」を感じてきた。勇猛・進取な魂の働きを荒魂と感じ、平安・柔和な作用を和魂と、更に和魂が不思議な働きをする場合を奇魂、幸福をもたらす働きをする場合を幸魂と感じ、伝えられてきた▼皇大神宮（内宮）には、天照大御神の四魂が調和・統一された直霊として祀られ、別宮・荒祭宮には、その荒魂が祀られている。豊受大神宮（外宮）には豊受大神の直霊が、別宮・多賀宮には、その荒魂が畏み祀られている▼人間には、五感がある。目・耳・鼻・舌・皮膚から感じるものであり、この視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の調和をはかり、魂を研ぎ澄ます事によって第六感を働かす事が出来ると考えられている。▼五百年ほど前に確立された「香道」には「聞香」、香りを聞く、とある。深みのある表現である。 （H・W）

神具・装束 結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
井筒 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567

事次第』まで遡ることができたが、それ以後は南北朝の騒乱の中で消滅していったと考えられてきた。

今回は祭事の詳細まで記したこの記録を中心に、『吉野期神事目録』『正平年中行事』『鎌倉期御供下行事次第』『宗像大菩薩縁起』とそれ以前の史料も参考に、氏子青年会と協力し復興にあたった。

太宰府天満宮巫女による「悠久の舞」

分かっているのは、①神歌（古歌）を一同で奉唱したこと、②巫女が舞を奉奏したこと、③「あおつみの餅」をお供えしたこと、④旧暦の十二月二十五日に斎行したことであった。

①の神歌は歌詞も記録にあり、これは神職・氏子青年会で奉唱、②の舞は記録がないため、この祭事に相応しい「悠久の舞」とした。③の「あおつみの餅」も名称のみで全く分からなく、國學院大學の加瀬直弥氏に御相談し、時代考証の結果小判型で楕円形の餅になった。④年末に五穀豊穣を感謝する意ということで秋季大祭に斎行とした。

そして、昭和三十七年「御長手神事（おんながてのしんじ）」がみあれ祭とネーミングされたように、この「八女神事」も神島宮司により高宮神奈備祭という名が冠された。「神奈備」とは、神々の降りてくる山や杜を意味し、まさに宗像三神が降りたった宗像山の高宮に相応しいネーミングとなった。

神島宮司による祝詞奏上

当日の舞は太宰府天満宮に助成いただき、同宮神職・巫女十三名に御奉仕いただき、三十三名の氏子青年会員も雑色に風折烏帽子、たつけ袴を着装し御奉仕いただいた。

祭典開始の一時間前の午後五時にはすでに多くの参拝者が詰め掛け、あっという間にイス席は満席となり、情報を聞きつけたプレス関係者に、アマチュア写真家が撮影ポイントを取り合い、祭典開始時に高宮は人の入る隙間の無い程の状態であった。

お年寄りを含め、多くの参拝者に立ち見で参拝いただいたが、浄闇の高宮で行われた宮司による祝詞奏上、一同での古歌の奉唱、悠久の舞と、一同感激した様子であった。

奉仕者も「良かった」「感激した」「来年もしたい」との声がしきりに聞こえ、祭典後の直会では早くも来年へ向けての話題に花が咲いた。

今後、限られた高宮祭場のスペースに参拝者をどう受け入れるか等、課題は残るが、沖ノ島を中心とする世界遺産登録運動への意義付けと、沖ノ島に代表される古代祭祀復興を担い、来年度も同日に斎行する予定。

祭典前の高宮祭場

秋季大祭斎行

九月十七日「沖津宮神迎え神事」斎行
沖津宮（沖ノ島）の御神璽を中津宮へ奉安

九月十六日、神島宮司以下神職四名が大島に渡島。参籠後の翌十七日早朝、沖・中両宮奉賛会関係者に、沖ノ島仲間ら一行は、沖ノ島へ渡島。天候にも恵まれ、海上は穏やかで、沖津宮御神璽を無事中津宮本殿に奉安した。

■御座船　海栄丸

（宗像漁協所属　中村　隆）

神迎へ神事出港前の御座船（9月17日）

海上神幸「みあれ祭」

本年より、

・輦台奉仕者は黄色の雑色を着装

・辺津宮の御神輿も御座船に乗り、長女・次女神をお出迎へ

眩しいほどの快晴となり、残暑の戻ったように朝から気温が上昇した十月一日午前八時三〇分、まず中津宮（大島）で出御祭が斎行。終了後、大島小学校鼓笛隊の演奏に併せ、沖・中両宮の御神璽を奉安した神輿が大島港まで御神幸。

沖津宮を出御する御神璽（前から3人目が奉持）

港の内外には、宗像七浦から参集した漁船約四〇〇隻が、『波切り御幣』『紅白の吹流し』『大漁旗』で飾り待機する中、沖・中両宮の神輿が御座船に遷されると、午前九時三〇分合図の花火が打ち上げられ全船出港。

二隻の先導船を先頭に、二隻の御座船、お供する供奉船その数約四〇〇隻の大船団は、幾筋もの航跡を残しながら進んだ。

一方その頃、宗像市田島の辺津宮でも午前九時に出御祭が斎行され、辺津宮御神璽が沖・中両宮の御神璽の到着する神湊港へと出御された。

大船団は秋晴れの爽やかな空の下を順調に海上神幸。空には取材のヘリコプターが舞い、玄界灘を勇壮に進んだ。

土曜日であり神湊の波止場、頓宮には既に多くの拝観者が殺到、午前九時過ぎには車は港に近づけない状況であった。

本年より辺津宮の神輿も、宮司らと共に神湊港から出港し、沖・中津宮の神輿を出迎えることとなり、神湊港沖で三宮の御座船は停船。供奉してきた各船は、順次三宮の御座船を一周し各港へと帰っていった。

その様子も、本年から輦台奉仕者に黄色の雑色を着装させたため、遠くからでもすぐに御座船がどれか確認することが出来た。

大島港を出港し、地ノ島方面へ向かう船団（頓宮より）

午前十時四〇分予定より若干遅れて、沖・中両宮の御座船は神湊港に無事到着。みあれ祭は滞りなく終了した。

みあれ祭　奉仕船（敬称略）

■沖津宮御座船　**第十六蛭子丸**
（鐘崎漁協所属　川合巨哲）

■中津宮御座船　**第七春日丸**
（宗像漁協所属　中村孝二）

■辺津宮御座船　**健栄丸**
（宗像漁協所属　三苫健二）

■花火船　**第三海漁丸**
（宗像漁協所属　沖西一宏）

■報道船　**みたけ**
（宗像漁協大島支所船）

一年振りにお揃いになられた宗像三女神の神輿三基は、玄海魚市場でお祓いの後、若い男衆に担がれ神湊の高台にある「頓宮」（御旅所）まで陸上神幸。頓宮祭を斎行し、御座船奉仕者には感謝状と記念品が贈呈された。

その後三宮の御神璽を乗せた三台の御座車は、宗像交通安全協会広報車、消防自動車に先導され、辺津宮まで陸上神幸、正午前無事に辺津宮に到着した。

到着後、三宮の御神璽は辺津宮本殿内陣の三座にそれぞれ奉安。ここから秋季大祭が始まり、一日祭（入御祭）では保存会々員の奉仕で主基地方風俗舞が奉納された。

陸上神幸奉仕車

■御座車
（株）新出光
西久大運輸倉庫（株）
宗像地区タクシー協会
【みなとタクシー（株）】

■先導車
宗像観光協会
【国民宿舎ひびき】
宗像地区交通安全協会
宗像市消防団第十一分団

■供奉車
宗像市消防団第十二分団
玄海ホテル旅館組合
【魚屋】【海宴】【玄海旅館】
【玄海ロイヤルホテル】
【神湊スカイホテル】

■主基地方風俗舞奉仕者（敬称略）
〈舞方〉
吉武 倫彦　中野 正徳
清水 陽介　深田 龍介
〈歌方〉
石津 典秀　中野 修
吉田 敏幸　岩佐 洋一
永島 卓爾

十月二日

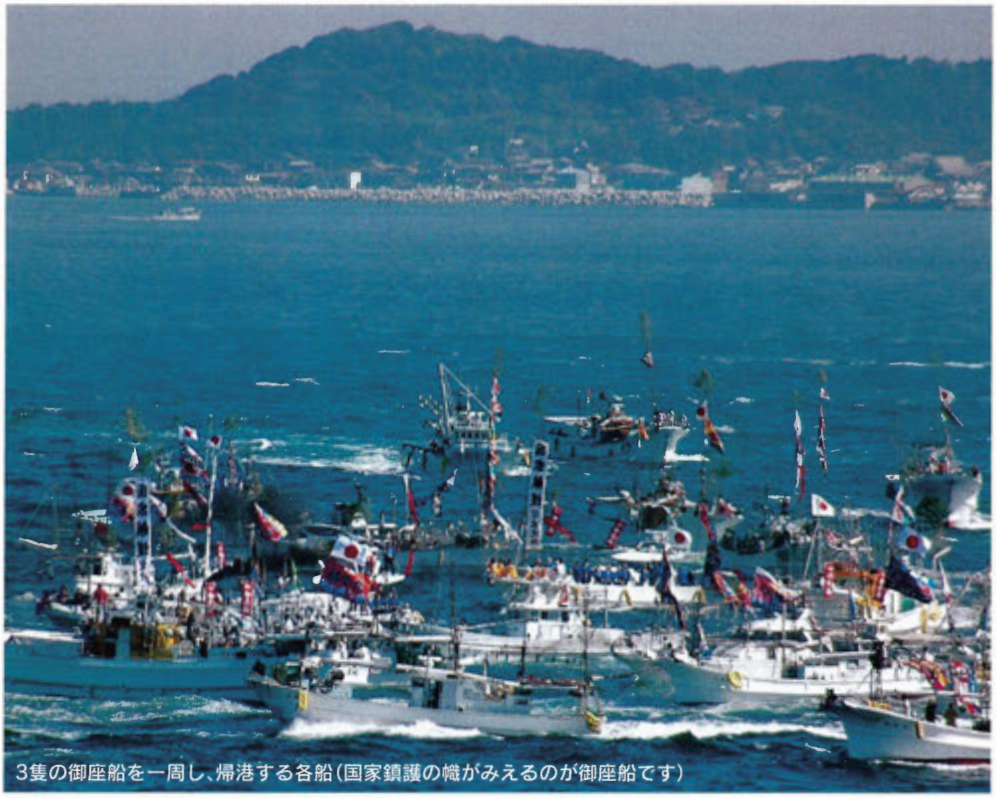
『流鏑馬神事』

南北朝時代からの歴史をもつ流鏑馬神事が、二日朝午前八時より宮木貞彦氏らにより奉納された。

射手が烏帽子と直垂姿に威儀を正し、本殿での命名式の後、神馬はお祓いを受け、神門前に設けられた馬場道を三頭が疾走。地上七メートルの的に向けて、次々と矢を射ると拝観者から盛んな拍手が起こっていた。

その年の豊作を占うと共に、矢は災難消除のお守りになると言われている。

射手奉仕者（敬称略）
宮木 光広


3隻の御座船を一周し、帰港する各船（国家鎮護の幟がみえるのが御座船です）

魚市場から頓宮へ行く三基の御神璽

入港する3隻の御座船が、よく目立ちます

木稲 修一
木稲 貴史

『浦安舞』

二日祭では地元玄海中学二年生の女生徒四名による奉仕で、浦安舞が奉納された。

緊張した面持ちで十二単を着装し、檜扇（ひおうぎ）と鈴を手に舞う姿は、拝殿に詰めかけた多くの参拝者を魅了した。

浦安舞奉仕者（敬称略）

北原しおり（玄海中学校二年）
嶺 沙知江（〃）
山口しおり（〃）
吉武 舞（〃）

頓宮に到着する御神璽

十月三日

『翁 舞』

三日祭では福岡市の喜多流（梅津忠弘氏門下）社中の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞は古くから延命招福の御利益が有名で、一目見ようと詰めかけた多くの参拝者は、風雅な舞にしばし見入っていた。

かくして、みあれ祭で幕を明けた三日に亘る秋季大祭は、高宮神奈備祭で締め括られた。本年は土・日・月曜日となり、昨年にも増して多くの参拝者で賑わいをみせた。県外をはじめ全国から多く参拝者が押し寄せる正月とは違い、この神事は宗像地域住民のまつりである。大祭期間中、多くの存じ上げた方々にお会いすることができ、お声も掛けていただき、その思いを一層強くした。

みあれ祭（御生れ祭）も、本来は年に一度の地域在住の氏子の皆様の生まれ変わりの祭りなのである。

翁舞（3日）

流鏑馬（2日）

浦安舞（2日）

吉田宗像市長も参列

吉村作治早大教授も来賓参列

頓宮から御神璽を運ぶ御座車の車列

九州国立博物館開館

～一般公開に先立ち展示状況を視察～

十月十六日のオープンを間近かに控えた九州国立博物館に、六日文化財管理事務局長を務める禰宜、広報担当の神職、学芸員の三名が出向、先の沖ノ島を撮影したスーパーハイビジョン映像、当大社神宝館から出陳する一二二点の神宝の展示状況を視察した。

一行はまず、九博の三輪嘉六館長と面談。今回の全面的な展示協力の御礼を受けるとともに、今後の相互協力を話合った。

話題は三輪館長の二度に渉る沖ノ島渡島時の話に華が咲き、「船酔いをしてからしばらく参拝していないが、体力が続くうちにもう一度是非渡島参拝したい」とのことであった。

その後、赤司展示課長の案内で、四階の常設展示『海の道、アジアの路』を視察。当大社の神宝は沖ノ島の大きな写真パネルを背景に展示、あえて写真をモノクロにすることで古代の雰囲気を演出しているとのことであった。

NHKエンタープライズ（以下＝NAP）制作の沖ノ島の映像は、七分一〇秒と放映時間は短いが、走査線四〇〇〇本、三〇〇インチの大画面は大迫力、まさに沖ノ島に渡島した様である（沖ノ島に渡島した者が言うのでまちがいありません）。特に島に渡ることの許されない女性に、島を体感していただきたかったとの事（NAP関係者）。この映像を完成させるのに、波止場のコンクリートを消すなどの技術力もさることながら、ン千万の制作費がかかったそうである。

金指輪、龍頭、銅鏡などの代表的な神宝も、島の映像に続いて放映され、肉眼では見えない細部の形・色（金銅製品には朱色が塗られていたそうです）や、手作りであるが故の左右非対称な形などを確認することが出来た。

写真でもお分かりの通り、館内の装飾、展示もほぼ終わり最後の仕上げといった状況で、学芸員をはじめ関係者は黙々と作業を続けられていた。

この号がお手元に届く頃には、無事オープンし多くの来館者で賑わっていることでしょう。沖ノ島の映像は必見です。

4Fの沖ノ島出土品の展示風景

4F入口

常設展示コーナー

沖ノ島の出土品のすばらしさを説明する三輪館長

九州国立博物館外観

（続）海の寄物 198

いしい ただし

頭椎太刀（上から二段目 出土頭椎）

福岡県民の念願であった九州国立博物館（以下＝九博）が十月十五日に開館した。『美の国日本』として開館記念特別展では「九州初公開の正倉院宝物・韓国・中国の名品・歴史に彩られた国宝級の美がここに集結する」とポスターにある。きっと見学は「驚きと感動の一日となろう」と期待している。

当然のことながら海の正倉院沖の島の国宝も展示されるし、地下の正倉院・宮地嶽大塚古墳出土の国宝も展示される。特に宮地嶽の出土品は、東京国立博物館にあり、初めて目にする人も多いことと思う。

九博を記念して、福岡県では資料館、博物館、文化団体で企画展や歴史ウォーキングの記念行事を行う。題して「ふくおか歴史〝彩〟発見」である。宗像大社神宝館では「刀剣展」二階では「沖ノ島出土展」がある。宗像市は十一月六日「田野瀬戸古墳」の発掘調査現地説明会が予定されている。福津市は同月六日に津屋崎の宮地嶽大塚古墳の横穴式石室が公開される。日本で二番目の石室の長さと巨岩には圧倒される。同月十二日には新原・奴山古墳群ウォークも行われる。

古賀市では、古賀市立歴史資料館で、永浦古墳と楠浦・中里古墳の出土物を公開する。題して「甲冑に身を固め、頭椎大刀を佩いた人たち」を十月十五日から十一月十五日まで行う。永浦古墳四号墳は甲冑と大量の鉄製武器、工具等二百数十点をすべて展示する。副葬されたそれらは、地方の首長クラスの所有物を示していると共にその規模、他地域との結びつきも知ることができる。尚、九月中旬に四号墳の遺物は一括、福岡県の文化財指定を受けた。

一方、古賀市青柳の楠浦・中里古墳群は工場団地造成に伴う工事で調査されたもので、一帯は弥生時代から中世までの遺跡がある。

その古墳のA一号墳は横穴式石室を有する円墳だが墳丘や蓋石、側石がほとんど失なわれていたが、盗掘者の目から逃れて、飾り外装大刀三振りが出土した。このうち一振りが頭椎大刀と呼ばれる大刀で、惜しいかな頭椎の部分は欠損しているが束部が婉曲しているところから頭椎大刀と推定したもので、東部には細かな列点により花弁風紋と円紋が刻されている。頭椎大刀は全国で一〇〇本ほど出土し、東日本に多く発見されている。そのうちの復元すると二・四メートルの特大のものが宮地嶽大塚古墳から出土しているのと、普通大きさのものが一本、計二本。同じく福津市の勝浦水押古墳も一本発掘されている。

またA六号墳出土の金銅製鐔などの刀装具から頭椎大刀の存在も考えれています。頭椎大刀を持った人達は、国内でどのような地位の人達か、勢力に属したのか、興味が尽きない。

ポスター

第五三一回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

宗像市　日の里　石松　弘次

翔ぶ蝶を小鳥が攫ひてゆきたりき一瞬なれど寂しくもあるか

（評）弱肉強食のこの世である。承知はしていても、犠牲になったのが蝶ゆえに作者の悲しみは深い。

宗像市　朝野　藤井　浩子

押入れに筑前琵琶とバイオリンわが生れし家いま異国めく

宗像市　大島　杉田　禮子

朝明けの境内すがしき箒目を避けて末社を拝みゆくなり

宗像市　日の里　大和　美由紀

山門をくぐりて涼しき藤寺に心ゆくまで大念珠繰る

（評）杉田さんは宗像大社、大和さんは二日市の武蔵寺であろう。それぞれに厚い信仰心が見え叙し方に滞りがない。

宗像市　大井　木原　ふさ子

夏も過ぎ人影のなき渚まで宮地の宮の雅楽聞えく

（評）喧騒の夏の過ぎた浜で聞いた雅楽、物静かな人柄まで見える一首で、移ろい易い季節を私達に語りかけて呉れる。

福岡市　南区　井田　有久衣

落葉ふみみ社めざす山道にかすかに響く潮騒の音

（評）木原作品の静に対し動とも言える一首、木原さんより若いのだろう、その若さが生んだ歌

宗像市　池田　森　龍子

雨に耐え花咲かせるる百日紅鮮やかなれど雰れ易しも

（評）散っては咲き咲いては散りする百日紅の最後の花か、花に対する惜別の情が、一首全体の節調のなかから見える。

宗像市　東旭ヶ丘　天野　玲子

花を賞で吹く風を詠むわが日々の続けと願ふ七十七賀に

（評）喜寿を迎えた作者の覚悟だが、何か頼りない心情を表している。七十七歳はまだまだ若い、これからも花を風を友として作歌して下さい。

宗像市　田野　森　甲子

終戦後ご飯代りのさつま芋に感謝の記事ありほのぼのと読む

（評）米作を止めてさつま芋を作ったら食糧不足は解消出来ると真面目に論じた事もあった戦後。そんな時代を知る森さんならでの感慨である。

宗像市　日の里　石松　弘次

リハビリに励みし吾子よこの刻を見守りおらむ寧楽の望月

福津市　光陽台　香月　照子

十五夜の光の中に人知れず我の心は氷りはじめぬ

（評）石松作品、「励みし」の過去と「この刻」の現在が、つながらないので結句の「寧楽の望月」が一首のなかで浮いてしまった。上句を「リハビリに励める吾子のこの刻を」とすると、寧楽の望月が生きてくるのだが。

香月作品、結句の「氷りはじめぬ」が唐突で判り難い。具体が欲しい処。

共に中秋の名月を詠って心ひかれるが惜しい。

宗像市　朝野　藤井　浩子

豆柴の仔犬飼ひてより夫との会話ふえゆき一日短かし

福津市　中央　池浦　千鶴子

列車待つホームをぬける浜の風今朝は涼しと思ひ立ちをり

福津市　在自　佐々木　和彦

あしひきの山も眠りに入る頃に大名行列人里に着く

福津市　中央　中村　勇

吸殻の少なくなりしを良しとして灰皿片付く子らが帰りて

うきは市　浮羽町　向　則正

亡き母が夢に現れ食めといふ魚新しき琉球漬を

宗像市　鐘崎　安永　久子

平成維新命かけてもらわねば吾の一票未来動かす

選者詠

カーテンをひらけば茂みに飛ぶ雀なんだ君等か遊べばいいのに

庭師入り茂み繁りのなくなりし庭をゆるゆる蟋蟀歩む

吾が前に受けし薬は何ならん慈姑頭の少年力士

宗像大社 歌会 俳句作品集（五〇六）

宗像市　東郷　田中　憲象

みなし栗集めて流る野辺の水

宗像市　光岡　白土　凌一

森林やバスの中より楽しまん

宗像市　日の里　花田いつ枝

観月のための庭下駄揃へけり

宗像市　東郷　宗風社俳句会　吉武　湧水

ふらここや数をかぞえて順を待つ

三浦美千代

新月の輝きましぬ深む秋

田中　雨葉

葛咲くや秘湯一戸の道標

木原　房子

秋めくや里山伐られ団地増ゆ

編集後記

高宮神奈備祭が再興されました。事前の新聞報道があったとはいえ、予想をはるかに上回る多くの方々に足を運んでいただきました。高宮祭場は高台にありますが、御高齢の方も多く、皆様の関心の高さにも驚きました▼祭典も想像を絶する素晴らしさで、プレス関係者の応対をしていた小生も、一参列者となって思わず見入ってしまった▼約六〇名の職員で運営される当大社、各部署ごとに動いていますが、我々にしか出来ないことと考えると、今回の高宮神奈備祭など、参拝者に感動を与える事をする。これが神威の発揚、神道教化に繋がっていくということを痛感しました▼恐らく今回参列された方は来年もまた参列されることでしょう。それほど広くない高宮祭場に、どうやって押し寄せた参拝者を受け入れるか、嬉しい課題が残りました。（M・O）

発行所　宗像大社社務所　宗像会

〒811-3505　福岡県宗像市田島
電　話　0940-62-1311（代）
発行人　伊藤佳和
編集人　大塚宗延
制　作　ジーエータップ
印　刷　ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円